



木もれびの森の外来種植物

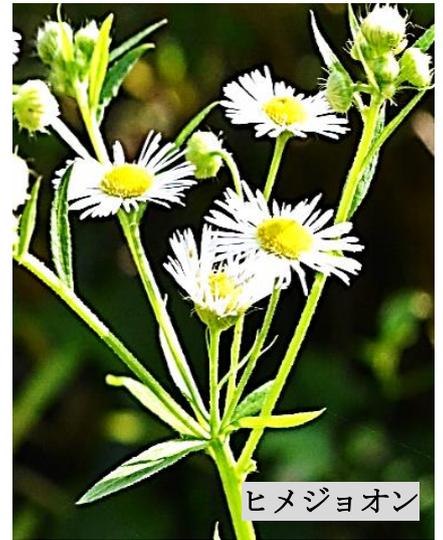
今年も暑さが厳しかったですね。歳を増すごとに暑さが体にこたえます。温暖化のせいでしょうか天候が不順で九州・東北・北海道では被害が甚大でした。

今回は外来種植物ヒメジョオンとハルジオンをとりあげます。ともに観賞用に輸入されたものですが、現在はいたる所にはびこり、日本生態学会によりこれらは日本の侵略的外来種ワースト100に指定されているそうです。

ヒメジョオンとハルジオンはよく似ていて区別しがたい花です。

【ヒメジョオンとハルジオンの比較】

ヒメジョオン（姫女苑）は、明治時代に渡来、北アメリカ原産、キク科、1～2年草で背が高い（30～150cm）、花期7～10月頃、茎を折って見ると茎の髓が詰まっている、葉は茎を抱かない、花（白色）は小さくて数が多い、根元の葉（根生葉）は花の時期にはない。



ヒメジョオン



ハルジオン

ハルジオン（春紫苑）は大正時代に渡来、北アメリカ原産、キク科、多年草で背が低い（30～70cm）、花期は4～6月頃、茎を折ると茎は中空です、葉は茎を抱き、花（白・ピンク）は大きく蕾のときは赤みをおび、下を向いて垂れ下がる特徴がある、根元の葉（根生葉）は花の時期にもある。

花が咲くころにはしっかりと上を向く特徴がある。従って、しっかりと見比べてみれば、はっきりと見分けがつく。

ハルジオンの名は秋に咲くシオン（紫苑）という植物がありこれに似て春咲くのでハルジオン（春紫苑）。ヒメジョオンはハルジオンに似ていて小型だからヒメ（姫）がつき、また美しく可愛いからヒメ（姫）がついて、ヒメジョオン（姫女苑）と名が付く。見た目も非常に似ている上に名前も紛らわしいが、両方ともにかわいらしい花です。（田崎）

木もれびの森の樹木

コナラ（ブナ科コナラ属）

秋が深まると、森の中ではコナラの実が熟し、やがてたくさんのだんぐりが落ちてくるようになります。落ちたどんぐりはすぐに根を張り、芽を出して10数cmほどの高さに成長した姿を見ることができます。しかし、今の森の中では、それ以上には、なかなか成長しません。コナラは陽樹（博物誌第45号で取り上げた、アカメガシワがその代表）なので、



春：コナラの雄花序

光が差し込む状況にならないと大きく成長できないのです。こもればの森は薪炭林（薪や炭を収穫する為にある森林）として、人々の生活を支えるコナラを主体とした森でした。コナラの特徴は萌芽更新（切り株から新芽を伸ばして成長すること）です。そこで、15年生ほどのコナラの森をすべて伐採して薪炭の材料を収穫し、明るくなった森から再び切り株のコナラを萌芽更新させ、また次の伐採時期を待つのです。

ところで、9月の森の中を歩いていて、緑色のどんぐりのついた枝（写真）がたくさん落ちていたのを見かけました。手に取って見るとどんぐりの帽子の縁近くに黒い点がありました。これはハイロチョッキリというゾウムシが産卵した孔です。試しにカッターで割ってみると小さな卵が一つ入っていました。産卵後、ハイロチョッキリは丁寧に口を使って枝ごと切り落とします。それで地面にコナラのどんぐりのついた枝先がたくさん落ちていたのです。卵はどんぐりの中で幼虫になり、実を食べて成長するのです。その後、幼虫はどんぐりから出てきて土に潜り、さなぎになります。興味深い営みです。来年の9月にぜひ確認してください。（鳥飼）



木もれびの森の森の虫たち（16）

木もれびの森の虫たちもこのところ頻繁に台風に見舞われ、太陽も顔を出さずすっきりしない憂鬱な状況が続いており、さぞかし嫌気がさしていると想像しています。森を散策してもザトウムシとジョロウグモ、ミスジマイマイは多く見られますが他の虫たちにはなかなか出会えません。ジョロウグモはメスの脱皮後や食事の最中を狙ってオスが交接しますが、その脱皮後と思われる情景を撮ることができました。又、ちょっとグロテスクなミスジマイマイの肌をご披露します。何故この様なのでしょうか？（海野）



一見、草の様 オナガグモ

シロオビアワフキの成虫



アカスジキン
カメムシ



アオオサムシ



キバラヘリカメムシ
の幼虫



ミスジマイマイ